

# 震災復興支援シンポジウム

～国連生物多様性の10年と  
国際森林年を踏まえて～



左上：基調講演する畠山氏

5月22日(日)、東京・青山の国連大学で、農林水産省、環境省及び国連大学が主催する「震災復興支援シンポジウム」が開催されました。

5月22日(日)、東京・青山の国連大学で、農林水産省、環境省及び国連大学が主催する「震災復興支援シンポジウム」が開催されました。

皇太子殿下もご聴講される中、「森は海の恋人」で知られる畠山重篤氏(牡蠣の森を慕う会代表、京都大学社会連携教授)は、基調講演に立ち、東日本大震災による自身の被災経験を話した後、20年に及ぶ山づくり活動を踏まえて構築した良い森が良い海をつくるという理論や実績のほか、国際的な成功例も紹介。震災復興でも山、川、海つながりだけでなく、それらの関わる各分野や地域の関係者のつながりが重要であると提案。この震災復興を一つの好機ととらえ、多くのつながりが生まれることに熱い期待を込めた講演でした。

続くパネルディスカッションでは、国連大学副学長で日本造園学会会長でもある武内和彦氏をコーディネイト役に、基調講演した畠山氏を含む7名のパネリストが、それぞれの活動や構想を説明。その上で、震災復興と森の再生、生物多様性

が国連生物多様性の10年と国際森林年を踏まえて～

保全が一体的に取り組まれるための方策について活発な議論が展開されました。

この中で、林野庁の末松広行林政部長は、森林・林業・木材産業の再生が震災復興に貢献するという国際森林年国内委員会での議論を紹介。また、地域内で循環可能なリスク分散型の優れた発電方法である木質をはじめとしたバイオマス発電が、今後の発電体系の一つとして期待されることにも触れました。

3時間半に及ぶ講演、議論に被災地を思う聴講者の拍手が鳴りやまぬ中で幕を閉じました。



国際森林年の趣旨や震災復興に向けての考え方を説明する末松林政部長